

(二〇一三年度)

8 国語問題 (六〇分)

(この問題冊子は23ページ、三問である。)

受験についての注意

- 一、監督の指示があるまで、問題冊子を開いてはならない。
- 二、試験開始前に、監督から指示があったら、解答用紙の右上の番号が自分の受験番号と一致することを確認し、所定の欄に氏名を記入すること。次に、解答用紙の右側のミシン目にそって、きれいに折り曲げてから、受験番号と氏名が書かれた切片を切り離し、机上に置くこと。
- 三、監督から試験開始の指示があったら、この問題冊子が、右に記したページ数どおりそろっていることを確かめること。
- 四、筆記具は、HかFかHBの黒鉛筆またはシャープペンシルに限る。万年筆・ボールペンなどを使用してはならない。時計に組み込まれたアラーム機能、計算機能、辞書機能などを使用してはならない。
- 五、解答は解答用紙の各問の選択肢の中から正解と思うものを選んで、そのマーク欄をぬりつぶすこと。その他の部分には何も書いてはならない。
- 六、マークをするとき、マーク欄からはみ出したり、白い部分を残したり、文字や番号、○や×をつけたりしてはならない。
- 七、訂正する場合は、消しゴムでいねいに消すこと。消しすぎはきれいに取り除くこと。
- 八、解答用紙を折り曲げたり、破ったりしてはならない。
- 九、試験時間中に退場してはならない。
- 十、解答用紙を持ち帰ってはならない。
- 十一、問題冊子は必ず持ち帰ること。

一

次の文章は柳父^{やぶあきち}章の著作を参考にしつつ翻訳について論じたものである。これを読んで後の問に答えよ。

翻訳という営みは、日本語にとって外的な営みではない。むしろ、日本語そのものに内在している営みである。日本語の歴史は、翻訳の歴史を抜きにしては語れない。上代大和時代における漢語の移入と、明治期における西洋語の（漢語の形で）移入は、翻訳という形をとって行なわれ、現在の日本語を形成してきた。

たとえば、真理、権利、社会、理性、疎外、個人、近代、美、恋愛、存在、自然、自由、さらには、彼・彼女などの言葉は、明治期に西洋語を移入する必要から新しく作られた言葉である。これらの言葉の多くは、現在ではかなり広く使われている。権利、社会、自由、恋愛などの言葉は日常生活でも頻繁に使われ、今日の日本語にとって不可欠の言葉となっている。だが、柳父によれば、これらの翻訳語は「生きた日常語の語脈では、継子のように、どこか馴染み難い」ところがあり、いまだに「私たちの言葉になりきっていない」²。

これは二十年前の観察ではあるが、現在でも思いあたる節はあるだろう。たしかに、改めてこれらの言葉のもつ語感を考えてみると、どこかしら人工的な手触りが残っていることに気づく。それは、今後十年や二十年で消えるものでもないだろう。柳父は、事の核心を次のように述べている。「明治以降」百年という時間は人の生涯にとつては長いが、言葉の歴史にとつてはまだ短い。言葉が、民族の母国語たる資格を得るには、千年を単位とする程の時間と、そして民衆の日常生活の隅々にも透^とする程の、広く深い背景が必要であろう。言葉の歴史の中では、私たちはまだ、明治初年の直ぐ間近に生きているとも言える。たしかに、現在のわれわれからすれば明治は遠い。しかし、われわれが話し書き考える言葉にとつては、明治は近い。その意味では、われわれにとつても明治は近いのである。³

明治期の翻訳語には、今でもどこかなじみ難い手触りがある。ましてや、新たに使われるようになった当時は、その異物的な手触りがより強く感じられたであろう。たとえば、⁴二葉亭四迷の『浮雲』には、「真理」という当時の翻訳語が独特の感覚をもって受け取られた事情が描かれている。「真理」は、英学を学んでいるハイカラ女性（お勢）と彼女に片想いしている書生（文

三)の会話の中に忽然として現れる。

お勢は不思議そうに文三の容子を眺めながら

「親より大切な者……親より……大切な……者……親より大切な者は私にも有りますワ。」

文三はうな垂れた頸を振揚げて

「エ、貴嬢にも有りますと。」

「ハア有りますワ。」

「誰……誰れが。」

「人ぢやアないの、アノ真理。」

「真理。」

ト文三は慄然と胸震をして唇を喰ひしめた儘暫らく無言。

ここでは、「真理」という言葉は人を「慄然と胸震をして唇を喰ひしめ」させるような何かである。それは、通常の会話の言葉のように「時間の経過に即して流れ去って」⁵いかない。むしろ、意識にひっきり、時間の流れを断つ何かである。このように「真理」はけっして英語「Truth」のたんなる置き換えではない。それは、あたかも異物のように、そこに存在している。実際、二人の会話には似たような言葉である「真実」も口にされるが、それはひっかかることなく自然に流れている。

では、文三をぶるぶると震えさせた「真理」とは何なのか。柳父によれば、それは何か得体の知れない言葉としての翻訳語である。表現や伝達のための道具ではない、いわばモノとしての言葉である。通常の言葉は表現・伝達のための手段として働いている限り、いわば透明な言葉であり、それ自体の存在が自覚されることはない。これに対して、翻訳語の「真理」は不透明なモノの手触りをもつ言葉である。翻訳語にはモノとしての言葉の存在が露出している、というのである。⁶

このことをもう少し考えてみよう。ふだん言葉はコミュニケーションのための道具としての実用的な機能をもっている。あるいは「文明の象徴」や「教養のしるし」としての有り難みという価値をもっていることもある。だが、ときにはこのような機能

や価値以前にも言葉そのものの存在を感じさせられる場合がある。たとえば、「しかし」という言葉を何度も繰り返して発音していると(「しかししかししかし……」)、この「しかし」が何か得体の知れないモノに思えてくる。そこに言葉のモノとしての存在が露呈していると考えることができる。新品のベントは交通手段としての実用品であり、また、財力や趣味を誇示するステータス・シンボルであるが、それ以前に、ピカピカのボディをもった何かである。

同じように、言葉もまた機能や価値以前の、感覚に訴えるモノとしての手触りをもっている。そして、人はその不思議な存在にふれて名状しがたい感動を受けることがある。文三をおそった名状しがたい感動は、「真理」という言葉に露出した言葉の存在の手ごたえである。およそすべての言葉にはこの存在の次元が横たわっているが、翻訳語の場合には、それが表面に露出しやすいのである。

言葉の存在に触れたときの感動には、プラスの場合もあればマイナスの場合もあろう。魅惑される場合もあれば、嫌悪感をもよおす場合もある。が、日本語の翻訳語の場合は、この感動はほとんどプラスであり、魅惑の感動である。明治期の翻訳語に代表されるように、翻訳語が先進文明の言葉としての響きをもっているからであろう。そこで、翻訳語は、その意味がわからなくても、何となくきれいで奥が深そうな響きをもっている。柳父によれば、「真理」「理性」「自由」などの翻訳語はちょうど小さな宝石箱カセットのようなものである。箱だけできれいで魅力的であり、何かキラキラしたものが入っていそうな感じがする。翻訳語は「生まれたはじめには意味は乏しい。意味はなくても、ことばじしんが人々を惹きつける。だから、使われ、やがて豊かな意味をもつようになる」。

このように考えると、翻訳語のもつ意味には、原語の意味の他に日本語としての意味があることがわかる。たんに日本語では原語と別の意味に使われるようになったという「意味」ではない。むしろ、「何となく魅力的で輝いている」という印象を与える「効果」のことである。たとえば、英語の *naive* はしばしば「愚かな」「幼稚な」「洗練されていない」という否定的な意味で使われる。これに対して、日本語の ナイーブ (これも立派な翻訳語である) はもっぱら「感じやすい」「純真な」「繊細な」といった肯定的な意味合いで使われている。が、柳父が問題にしているのは、ナイーブが *naive* とは違う意味をもっていることではない。

それは、少し英語をかじった人が指摘したがる小問題にすぎない。問題は、ナイーブという言葉の形や響きそのものが、少なくとも当初は、新鮮な輝きを帯び、意味ありげな独特の印象をもたらしたという点にある。

柳父はこれを「宝石箱効果⁸」と呼んでいる。翻訳語はたんに外国語の言葉の意味を伝える言葉なのではない。同時に、言葉そのものの存在をかいま見せることによって、独特の効果を及ぼす言葉なのである。

(宮原浩二郎『ことばの臨床社会学』)

問一 傍線部1「日本語そのものに内在している」とはどのような意味か。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 日本語の性質に適合している
- b 日本語の方言どうしの間でも必要である
- c 最終的には日本語の中に定着する
- d 日本語の形成過程の一部である

問二 傍線部2「私たちの言葉になりきっていない」とはどういうことか。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 知らない日本人はほとんどいないが、日常生活ではあまり活用されていない。
- b 日本の知識人の間では流通していても庶民の日常には浸透していない。
- c 日本人の日常的な語彙になっていてもどこかよそよそしい感じが残る。
- d 現代人は頭でよく分かっているが、体ではあまり感じることができない。

問三 傍線部3「われわれにとつても明治は近いのである」と言えるのはなぜか。もつとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a 明治時代の日本語は、それ以前の日本語とは違って、現代人が読んでも理解できるものであり、それほど時間の隔たりを感じさせないから。

b 明治時代から現代までの間に、新しくつくられた言葉が日本語の語彙として定着するのに十分な長さの時間が経っていないから。

c 明治時代に、新しい言葉をつくって日本社会の発展に貢献した先人の努力を考えると、現代人も明治時代に特別な愛着を感じるから。

d 明治時代の人々も、現代人と同じように、新しい言葉をつくる努力を惜しまなかったことを考えると、親近感がわくから。

問四 傍線部4「二葉亭四迷」の作品を次の中から一つ選べ。

a 小説神髓 b あひゞき c たけくらべ d 海潮音

問五 傍線部5はどういうことか。もつとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a 英語 truth の意味を表現し伝達するための手段であるだけではない。

b 英語 truth の本来の意味からずれた意味を含んでいる。

c 英語 truth の意味の広がりや深みを十分に反映していない。

d 英語 truth のために新しい日本語をつくったのであって、古来の日本語の単語を当てはめたのではない。

問六 傍線部6の説明として、もつとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 翻訳語の背後にある真実は、翻訳語特有の人工的な字面が邪魔になって、見通すことが難しい。
- b 翻訳語の「真理」はもともとあいまいな言葉であり、その真の意味を理解することは難しい。
- c 「真理」という翻訳語は、ふだんは自覚されない言葉そのものの存在を感じさせる。
- d 翻訳語「真理」の物理的側面である「しんり」という音は、原語がもっている感触をうまく伝えていない。

問七 傍線部7について、「不思議な存在」とあるがどのような点が「不思議な」のか。もつとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 言葉は一種のモノでありながら、実用的な機能や有難い価値といった、たんなるモノを越えるはたらきをもっている点。
- b 言葉は、たんなる空気(音)やインクの染み(文字)にすぎないのに、りっぱに意味を表現し伝達する点。
- c 言葉の意味は人間の精神によって把握されないかぎり存在しないのに、それ自体で存在しているかのように思われる点。
- d 言葉は、コミュニケーションの手段や文明や教養のシンボルとして使われるものでありながら、その存在自体が意識されることもある点。

問八 傍線部 8 「宝石箱^{カセット}効果」の説明として、もつとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 翻訳語は先進的な文化を代表する言葉であるため、マイナスの意味をもつ言葉でもプラスの意味をもつように見える。
- b 翻訳語は外見が魅力的であるため、どんな空疎な言葉であつても何か深い意味があるかのように見える。
- c 翻訳語の意味とは別に、翻訳語自体がもっている存在感が肯定的に作用し、その言葉を魅力的に見せる。
- d 翻訳語そのものももっている強烈な存在感に妨げられて、原語の真意が不透明になり伝わりにくくなる。

問九 次の記述のうち本文の内容に合致するものはどれか。適切なものを二つ選べ。

- a 「権利」「社会」「自由」「恋愛」などの翻訳語は、現在では日常語として流通しているので、それが明治時代に新しくつくられた言葉であることは、ほとんど意識されていない。
- b 『浮雲』には、翻訳語が独特の感覚をもって受け取られた事情が描かれているが、その描写は現代のわれわれにはたいへん新鮮なものに感じられる。
- c 「真理」という普遍的な価値を表す語の存在感は、通常の語とは違って時間とともに流れ去ることはなく、人を戦慄せんりつさせるはたらきがある。
- d 翻訳語にかぎらず言葉というものには、実用的な機能やシンボリックな価値がある以前に、感覚に訴える存在としての次元がある。
- e 日本語の翻訳語は、先進的な文明の言葉として肯定的な感動を与えることもあれば、異質な文明の言葉として否定的な感動を与えることもある。
- f 翻訳語は原語と一対一に対応する意味を確定することができず、つねに多様な意味をもつため、あいまいであることを免れない。
- g 日本語の「ナイーブ」は、英語の naive とは異なり、肯定的な意味で使われるのがふつうであり、原語とは異なった意味をもっている。

二

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

恋愛は人世の秘鑰なり、恋愛ありて後人世あり、恋愛を拙き去りたらむには人生何の色味かあらむ、然るに尤も多く人世を
観じ、尤も多く人世の秘奥を究むるといふ詩人なる怪物の尤も多く恋愛に罪業を作るは、抑も如何なる理ぞ。古往今來詩家の
恋愛に失する者、挙げて数ふ可からず、遂に女性をして嫁して詩家の妻となるを戒しむるに至らしめたり、詩家豈無情の動物
ならむ、否、其濃情なる事、常人に幾倍する事著るし、然るに綱繆終りを全うする者、¹少きは何故ぞ。ギヨオテの鬼才を以
て、後人をして彼の頭は黄金、彼の心は是れ鉛なりと言はしめしめ、其恋愛に對する節操全からざりければなり。バイロンの
嵩峻を以ても、彼の貞淑寡言の良妻をして狂人と疑はしめ、去つて以太利に飄泊するに及んでは、妻ある者、女ある者をし
てバイロンの出入を厳にせしめしが如き。或はシエレイの合歡未だ久しからざるに妻は去つて自ら殺し、郎も亦た天命を全う
せざりしが如き。²彼の高嚴莊重なるミルトンまでも一度は此轍を履んとし、曉响豪逸なるカーライルさへ死後に遺筆を梓す
るに至りて、合歡団欒ならざりし醜を發見せられぬ。³其他マルロー、ベン・ジョンソン以下を数へなば、誰か詩人の妻たるを
怖れぬ者のあるべき。

思想と恋愛とは仇讐なるか、安んぞ知らむ、恋愛は思想を高潔ならしむる嫺母なるを。エマルソン言へる事あり、尤も冷
淡なる哲学者と雖、恋愛の猛勢に驅られて逍遙徘徊せし少壮なりし時の靈魂が負ふたる債を済す事能はずと。恋愛は各人の
胸裡に一墨痕を印して、外には見ゆ可からざるも、終生抹する事能はざる者となすの奇跡なり。然れども恋愛は一見して卑
陋暗黒なるが如くに其実性の卑陋暗黒なる者にあらず。恋愛を有せざる者は春來ぬ間の樹立の如く、何となく物寂しき位地に
立つ者なり、而して各人各個に人生の奥義の一端に入るを得るは、恋愛の時期を通過しての後なるべし。夫れ恋愛は透明にし
て美の真を貫ぬく、恋愛あらざる内は社会は一個の他人なるが如くに頓着あらず、恋愛ある後は物のあはれ、風物の光景、何
となく仮を去つて実に就き、⁴隣家より我家に移るが如く覚ゆるなれ。

蓋し人は生れながらにして理性を有し、希望を蓄へ、現在に甘んぜざる性質あるなり。社会の夤縁に苦しめられず真直に伸

びたる小児は、本来の想世界に生長し、⁵ 実世界を知らざる者なり。然れども生活の一代に実世界と密接し、抱合せられざる者はなけむ、必ずや其想世界即ち無邪氣の世界と実世界即ち浮世又は娑婆と称する者と相争ひ、相睨む時期に達するを免れず。実世界は強大なる勢力なり、想世界は社界の不調子を知らざる中にこそ成立すべけれ、既に浮世の刺衝に当りたる上は、好しや苦戦搏闘するとても、遂には弓折れ筋尽くるの非運を招くに至るこそ理の數なれ。此時、想世界の敗将氣沮み心疲れて、何物をか得て満足を求めんとす、努力義務等は実世界の遊軍にして常に想世界を覗ふ者、其他百般の事物彼に迫つて劍鎗相接爾す、彼を援くる者、彼を満足せしむる者、果して何物とかなす、曰く恋愛なり、美人を天の一方に思求し、輾転反側する者、実に此際に起るなり。生理上にて男性なるが故に女性を慕ひ、女性なるが故に男性を慕ふのみとするは、人間の価格を禽獸の位地に遷す者なり。春心の勃発すると同時に恋愛を生ずると言ふは、⁶ 古来、似非小説家の人生を卑しみて己れの卑陋なる理想の中に縮少したる毒弊なり、恋愛豈單純なる思慕ならんや、想世界と実世界との争戦より想世界の敗将をして立籠らしむる牙城となるは、即ち恋愛なり。

此恋愛あればこそ、理性ある人間は悉く悩死せざるなれ、此恋愛あればこそ、実世界に乗入る慾望を惹起するなれ。コレリツヂが「ロメオ・エンド・ジュリエット」を評する中に、ロメオの恋愛を以て彼自身の意匠を恋愛せし者となし、第一の愛婦なる「ロザリン」は自身の意匠の仮物なりと論ぜるは、蓋し多くの、愛情を獸慾視して実性を見究めざる作家を誡しむるに足る可し。

恋愛は剛愎なるバイロンを泣かせしと言ふ微妙なる音楽の境を越えて広がれり。恋愛は細微なる美術家と称へられたるギョオテが企る事能はざる純潔なる宝玉なり。彼の雄邁にして軟優を兼ねたるダンテをして高天阜土に絶叫せしめたるも、其最大誘因は恋愛なり。彼の痛烈悲酸なる生涯を終りたるスウイフトも恋愛に教度の敗れを取りたればこそ、彼の如くにはなりけれ。嗚呼恋愛よ、⁷ 汝は斯くも權勢ある者ながら、爾の哺養し、爾の切に需めらるる詩家の為に虐遇する所となる事多きは、如何に慨歎すべき事ならずや。

女性を冷罵する事、東西厭世家の平なり。釈氏も力を籠めて女人を罵り、沙翁も往々女人に関して嫌らぬ語氣を吐けり。

我露伴子の「一口剣」を草するや、巧に阿蘭を作りて作家の哲学思想を發揮し、更に「風流悟」に於て其解脱を説きたる所、余の尤も服する所なり。蓋し女性は感情的の動物なり、詩家も亦た男性中の女性と言ふ可き程に感情に富める者なり。深夜火器を弄して闇中の人を愕かせしバイロン、必らずしも狂人たりしにあらざる可し、蓋し女性は或意味に於て甚だ偏狭頑迷なる者なり、而して詩家も亦た、或点より觀れば之に似たる所あるを免れず。蓋し女性は優美繊細なる者なり、而して詩家も亦た其思想に於ては優美繊細を常とする者なり、豪逸雄壯なる詩句を迸出する時に於ても、詩家は優美を旨とするものなるを以て、自ら女性に似たるころあるを免れず。其他生理學上に於て詳に詩家の性情を檢察すれば、神經質なるころ、執着なるころ等、類同の個条蓋し数ふるに違あらざる可し。是等の類同なる諸点あるが故に、同性相忌むところよりして、詩家は遂に綱繆を全うする事能はざる者なるか。夫れ或は然らむ、然れども余は別に説あり、請ふ識者に問はむ。

(北村透谷「厭世詩家と女性」)

〔注〕 ○人世…人の世の中。 ○秘鑰…秘密を解くかぎ。 ○詩人…文學者。 ○綱繆…睦み合うこと。 ○ギョオテ…ゲ

テ。 ○嵩峻…人格が優れていること。 ○飄泊…漂泊。 ○シエレイ…シエリー。 ○合歡…歡樂を共にすること。

○嶢峯豪逸…気性が山のように高く強いこと。 ○仇讐…かたき。 ○孀母…乳母。 ○エマルソン…エマーソン。

○卑陋…いやしいこと。 ○夤縁…からみあつてゐること。 ○刺衝…刺激すること。 ○搏闘…互いに打ち合うこと。

○接爾…接する状態。 ○コレリツヂ…コールリツジ。 ○剛愎…強情で人に従わないこと。 ○雄邁…雄々しく強いこと。

○輒優…柔弱でやさしいこと。 ○スウイフト…スウイフト。 ○哺養…はぐくみ養うこと。 ○釈氏

…シヤカ。 ○沙翁…シエイクスピア。 ○露伴…幸田露伴。 ○迸出…ほとばしり出ること。

問一 傍線部1について、「其恋愛に対する節操全からざりければなり」とはどういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 恋愛に対する倫理的な態度がどういふものか理解できていなかったことが、その理由となっているということ。
- b 恋愛に対する正しい姿勢を貫き通すことができなかつたことが、その根拠となっているということ。
- c 恋愛には一定のルールがあるにもかかわらずそれを無視したことが、その理由となっているということ。
- d 恋愛には感情の一致という目標があるのにそこに到達できなかったことが、その根拠となっているということ。

問二 傍線部2について、「此轍を履んとし」はどういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 妻の貞淑に対して節操を以て応えるという誠実さを先人の行為から学ぼうとしたことがあるということ。
- b 妻の節操の立派さに抑圧されて妻に反抗した先人のようにならないようにしようと思ったことがあるということ。
- c 妻に対する裏切り行為を起こした先人に影響されて妻に対する裏切りをしそうになったことがあるということ。
- d 妻に対する不貞という先人の過ちと同じ過ちを犯す危険に陥つたことがあるということ。

問三 傍線部3について、「誰か詩人の妻たるを恐れぬ者のあるべき」と筆者が考えるのはなぜか。その理由としてもっとも適切なものを、次の中から一つ選べ。

- a 昔から今に至るまで、詩人は奇人変人の性質を帯びているため妻を狂気に陥らせる人が多かったから。
- b 昔から今に至るまで、詩人は感情が発達しているため理性的に生きることのできない人が続出しているから。
- c 昔から今に至るまで、詩人は夫として妻に対する貞節を守ることをしない人がたくさんいるから。
- d 昔から今に至るまで、詩人は家庭の団欒より自らの詩作を優先する人がほとんどであったから。

問四 傍線部4「隣家より我家に移るが如く覚ゆるなれ」は、どういふことを言っているのか。次の中からも適切なものを一つ選べ。

- a いやしく下品に感じられた恋愛が、自分を高める崇高なものであると気づくこと。
- b 恋愛は若い一時のものであるという考えから、恋愛は人間に一生関わるものであるという考えに変わること。
- c 人間は社会の中で個々に生きるものだと思っていたが、人間は自然を感じて生きるものだと悟ること。
- d 自分と無関係であると思っていた事象が、自分と深く関わる意義あるものとして感じられること。

問五 傍線部5「本来の想世界に生長し」とあるが、筆者は「想世界」をどのようなものと考えているのか。該当するものを次の中から一つ選べ。

- a 想世界が実世界と衝突することにおいては、例外はない。
- b 想世界は、社会の強烈な動きに接したときに明確な輪郭をとって現れるものである。
- c 想世界は実世界に破れることがあっても、不滅の輝きをもっている。
- d 想世界が社会の不調子を改善する力をもつことは、一般に知られている。

問六 傍線部6は、どういふことを言っているのか。次の中からも適切なものを一つ選べ。

- a 人が社会と戦って敗れたとき、再び戦いに出ることを思いとどまらせてくれるものが恋愛であるということ。
- b 恋愛は、人が社会に出てその社会から傷つけられたとき、社会から守り癒す力をもっているということ。
- c 人が社会と戦って敗れたとき、社会で生きることより個の充実をもって生きることの大切さを教えてくれるのが恋愛であるということ。
- d 恋愛は、人が社会に出てその社会から傷つけられたときにこそ激しく燃えあがるということ。

問七 傍線部7について、「詩家の為に虐遇する所となる」とはどういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 恋愛は、詩家に強く必要とされ大切にされているのに、その詩家を悲惨に陥れるということ。
- b 恋愛は、詩家の人生のなかで最もその存在が正当性をもつのに、詩家に対してむごい仕打ちをするということ。
- c 恋愛は、詩家によって理想視されているのに、詩家に大きな失望を与えるということ。
- d 恋愛は、詩家が作品に書くことでその魅力が認められているのに、詩家を惑わしつづけているということ。

問八 傍線部8「我露伴子」とあるが、露伴の作品を次の中から一つ選べ。

- a 十三夜
- b 外科室
- c 五重塔
- d うたかたの記
- e 重右衛門の最後

問九 傍線部9について、筆者がバイロンを、「必らずしも狂人たりしにあらざる可し」と考える根拠は何か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a バイロンが閨中に忍び込んだのは、バイロンに女性と詩家がもつ執着が作動したからであったということ。
- b バイロンが閨中に忍び込んだのは、詩家に特有の恋愛にのめり込む性質があったからだということ。
- c バイロンが閨中に忍び込んだのは、バイロンが優美なものに魅かれる詩家であったからだということ。
- d バイロンが閨中に忍び込んだのは、詩家が女性と同じように感情に富める性質を有しているからだということ。

問十 筆者の主張として該当するものを、次の中から一つ選べ。

- a 詩家が女性と一生仲睦まじく暮らすことができないのは、詩家の女性性が女性との間に同性相忌む原理を作動させてしまうからである。
- b 恋愛と思想は対立するものであり、詩家においては恋愛が思想を押しつける場合が多い。
- c 恋愛は理性のある人をより高潔にするが、理性の乏しい詩家に対しては破滅の源となる。
- d 恋愛は単なる思慕や動物的な本能ではなく、高度に発達した、男と女をつなぐ精神的営為である。
- e 人は、恋愛をすることによって人生の深いところに触れたり社会を認識したりするのである。

三

次の文章を読み、後の問に答えよ。

教育の現場から繰り返し指摘されているように、外国語というのは母国語習得のあとに学べば、母国語を批判的にとらえ返す生産的な契機を提供してくれるが、母国語習得と並行して学ぶと、どちらの国語も不十分にしか運用できない「セミリンガル」を生み出してしまふ。

私たちは母語を話すときに文法規則というものを意識しない。

文法規則を学んで「ふうん、言葉ってそういう仕掛けになっていたのか……」ということに気づくのは古文や英語を学び始めてからである(古文は中学生にとってはとりあえず「外国語のようなもの」である)。

¹バイリンガルというのは、二つの国語を「母語のようなもの」として運用することのできる人であり、定義からして、どちらの言語をも文法規則というものを意識しないで使うことができる。小学生まで日本において、日本語を文法規則を意識せずに使いこなし、中学から高校までアメリカにおいて、やはり英語を文法規則を意識しないで使いこなせるようになって……という人の場合がそうである。

この人の場合、「言語の文法規則を体系的に学ぶ」ということをどちらの国においても学習していない。その結果どういふことになるかというと、「流暢なのだけれど、微妙に不自然な言葉」をどちらの国語についても使うようになる。

そして、いちばん問題なのは、「微妙に不自然らしいことは、まわりの人のちよつとしたリアクションからわかるのだけれど、どこがどういふふうにおかしいのか自分には説明できないし、まわりの人も説明できない」ということである。

「うーん、なんか変だよね。日本語ではそういうふうには言わないけど、どうしてか知らないけど」というようなあたりさわりのない訂正がときどき入るだけである。もちろんその程度のことなら日常のコミュニケーションには何の不自由もない。

けれども、自分の使っている言葉が「母語の自然で規範的なたちである」という自信がもてないという事実は想像以上に重いものである。

何度も書いていることだけれど、「言葉の力²」というのは、それが思考を適切に表現できるヴィークルとして性能がよいということではない。ある名詞を口にする、それを修飾することのできる形容詞のリストが瞬間的に頭に並び、ある副詞を口にする、それをびたりと受け止める動詞が続く……というプロセスが無意識的に高速で展開するという言語の「自律」のことである。

母語運用能力というのは、平たく言えば、一つの語を(場合によっては一つの音韻を)口にするたびに、それに続くことのできる語の膨大なリストが出現し、その中の最適の一つを選んだ瞬間に、それに続くべき語の膨大なリストが出現する……というプロセスにおける「リストの長さ³」と「分岐点の数の多さ⁴」のことである。「梅の香りが……」という主語の次のリストに「する」という動詞しか書かれていない話者と、「薫ずる」、「聞こえる」という動詞を含んだリストが続く話者では、そのあとに展開する文脈の多様性に明らかな差が出る。

「分岐点の数の多さ」というのはわかりにくいかもしれないが、「分岐点がない言語」を思い浮かべればわかる。

「分岐点がない言語」というのは⁴ストックフレーズのことである。ある言葉を選ぶと、そのセンテンスの最後までが「まとめ」「出力されるようなフレーズだけを選択的に言い続ける人がいる(校長先生の朝礼の言葉とか議員の来賓祝辞を思い浮かべればよろしい)。

ある語の次に「予想通りの語」が続くということが数回繰り返されると、私たちはその話者とコミュニケーションを継続したいという欲望を致命的に殺⁵がれる。

「もう、わかったよ。キミの言いたいことは」というのはそういうときに出る言葉である。

外国語を学ぶときに、私たちはまず「ストックフレーズ丸暗記」から入る。それは外国語の運用の最初の実践的目標が「もうわかったよ、キミの言いたいことは」と相手に言わせて、コミュニケーションを「打ち切る」ことだからである。たしかに、ホテルのレセプションや航空会社のカウンターや税関の窓口ではまさにそのことが求められている。⁵「理解される」というのは

「それ以上言葉を続ける必要がなくなる」ということだからである。

自分が何を言いたいのかあらかじめわかっている、相手がそれをできるだけ早い段階で察知できるコミュニケーションが外国語のオーラル・コミュニケーションの理想的なかたちである。

けれども、それは母語のコミュニケーションが理想とするものとは違う。

母語言語運用能力というのは、端的に言えば、「次にどういう語が続くか(自分でも)わからないのだけれど、そのセンテンスが最終的にはある秩序のうちに収斂^{しゅうれん}することについてはなぜか確信せられている」という⁶心的過程を伴った言語活動のことである。

7
ストックフレーズを大量に暗記して適切なタイミングで再生すること、言語を通じて自分の思考や感情を造形してゆくと
いう(時間と手間ひまのかかる)言語の生成プロセスに身を投じることは(結果的にはどちらも)たくみにある言語を操る」とい
うふうに見えるけれど、内実はまったく別のことである。

(内田樹『街場の読書論』)

〈注〉 ヴィークル：乗り物。運搬手段。

問一 傍線部1について、筆者は「バイリンガル」をどのような性質を持つものにとらえているか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a バイリンガルは外国語と早い機会に出会って、言葉に対する反省的な思考を経ている人のことを言い、なまかじりで複数のことばを使いこなすセミリンガルと区別される。

b バイリンガルはどちらの言語に対しても批判的・自覚的に向き合うことがないので、言語に対する反省的な思考を身につけられない。

c バイリンガルは複数の言葉を母語としている人々を言い、彼らは母語としての豊かさと表現の幅の広さを複数の言葉でつかいこなすことができる。

d バイリンガルは文法規則を意識しないで言葉を学ぶため、文法に縛られない自在さを身につけることができている。

問二 傍線部2「言葉の力」とはどのようなものだと筆者は言っているか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 早さを犠牲にしても慎重に正確に伝えていこうとする能力

b 情報をできるだけ早く、的確に伝えるために、すべてを賭ける能力

c 情報を簡潔に伝えるポイントポイントへの凝縮力と決断力

d 言葉を豊かな文脈の広がりの中で響かせながらつなげる能力

問三 傍線部3の「リストの長さ」と「分岐点の数の多さ」とはどのようなことを意味しているか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 言語の線条的な連なりとその「切れ」が作り出す抑揚が、言語の自律的なリズムをかたちづくるということ。
- b 言語の選べたかもしれない可能性の広がりとその選択の回数が言語の豊かさを構築するということ。
- c 教養の深さによって裏付けられた語彙の蓄積と熟成度が文章としての格調を決定づけるということ。
- d 文脈のうねりをもたらず判断の揺れと選択の積み重ねが、言語の個性的な印象を作り上げること。

問四 傍線部4「ストックフレイズ」というのはどういう意味で使われているか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 状況に応じて繰り出される語句で、受け手にその先に続く言葉が分かってしまうもの。
- b 相手に対する歯の浮くようなお世辞・お追従が込められた言葉で、真意が不明なもの。
- c 儀式の場合などに使われるもってまわった表現で、みせびらかすような荘重な響きがあるもの。
- d あまり深く考えずに使用されるお手軽な表現、ぞんざいな言葉で、誠意が感じられないもの。
- e 普段は使わないとっておきの定型句で、人前であいさつなどするために特別に使うもの。

問五 傍線部5「理解される」というのは「それ以上言葉を続ける必要がなくなる」ということだと筆者が言うのはなぜなのか。外国語の習得について述べた次の選択肢の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 実用的な外国語習得の目的は、段階的にコミュニケーションを広げるためのもので、その初期段階においてはコミュニケーションそのものを目標としないから。

b 実用的な外国語習得は、よりよい相互理解のために、理解できないことをできるだけ早く伝える訓練を優先しているから。

c 実用的な外国語習得の目標が、相手を理解するためというよりも、相手を攻撃し、相手からいかにして身を守るかということを第一の目標にしているから。

d 実用的な外国語習得の目標が、とりあえずは表面的な理解さえ得ればいいのであって、深い理解はいらぬというあらゆる種の割り切りに根差しているから。

問六 傍線部6の「心的過程」とはどのようなものか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a あらかじめ頭の中で自分の考えを反復的にまとめあつて、そのおかげで自在に言葉が出てくる過程。

b 言葉が一旦発せられると、するするとはどけていくように、言葉が溢れ出てきて、思い通りに書いてしまう過程。

c 言葉が出ていくにつれて自分でも思いがけない発想が展開されて、自分の発想の意外さに圧倒されてしまう過程。

d 自分の言葉がある地点に向けて着地しようとしているというおぼろげな予感に導かれるようにして、言葉を紡いでいく過程。

問七 傍線部7について、「内実はまったく別のことである」とはどう別なのか。筆者の考えに合致するものを次の中から二つ選べ。

- a 外国語の学習は、母語の文法規則性を自覚させる役割を果たしているので、母語の豊かさに気づくために有効である。
- b 外国語の学習は効率性を重視しているので、母語のまわりくどい表現を整理することができ、グローバルな交流を進めるのに向いている。
- c 母語の語彙の豊かさと文脈の多様性は、物事を掘り下げて考えようとする時、欠かせない武器となるが、ありあわせの言葉で、適当にその場をしのごことの多い外国語習得の場合それはあまり期待できない。
- d 外国語がたくみになった者は、母語の学習をおろそかにしがちだが、鍛え上げられた母語の運用能力は、オーラルコミュニケーション重視の外国語学習にとっても必要不可欠なものである。
- e 外国で自由にならない言葉に「つまづくことにより、母語の豊かさは実感されるものであるが、母語の豊かさを手放すことなく、実用的な外国語学習と共存させなければ日本語の未来はない。
- f 外国語運用においては、自分が言いたいことをどう効率良く伝えられるかを問題とし、母語運用においては言葉によつて自分が言おうとすることを豊かにかたちづくる道筋そのものを問題とする。

